

ゆくのなら、私は洋畫界の前途を悲觀せざるを得ぬ。(四月九日)

三宅克己氏を柏木の邸に訪ふ、外遊一ヶ年間の製作三百餘點、其大半を親しく見ることが出来た、繪は大ならざるにもせよ、また密ならざるにもせよ、これだけの多數を製作された其勤勉と熱心には、まづ第一に敬服せざるを得ぬ。

氏は勉めてローカルカラーを出すべく、繪の上に自己の作意を加へざりしといふ。この言によつて、一覽の上感じたことは、各地方各々特有の色彩調子を有すること。自己の趣味に投じた揚處が傑作を多く出すこと。境遇が人を造るごとく、場處が繪を造ること。日本と英吉利と風景のよく似てゐること。日本の風景の色や調子の貧弱なること。西洋で畫いた繪が旨くつて日本で畫くと拙いといふ批難を、是迄よく聞いたが、實は空氣の相違材題の相違で、其人の技倆に大なる關係のないこと。歐洲の景色は空とよく調和してゐること。そして建築物を多く畫かれた點より見ると、山水の風景はあまり日本人の興味を惹くものが無かつたのであらうかと思つた。

氏は各國を廻つて來たが、日本程水彩畫の盛むな國は無く、また日本の景色ほど水彩畫に適した處は無いと思ふと言はれた。私共の理想は、やがて現實となつて來る、その時期は今より遠くはあるまい。(四月十四日)

* * * * *

妙高山の麓

江

晴

五月六日 晴

夜十時上野發の汽車にて信濃柏原に向ふ。乗客多く、幾人か一等室へ廻されたり、夢成りがたし。

七日 晴

三時頃東の空は白めり、汽車は碓氷峠にかゝりて朝風寒し、溪間にうす紫せるは八汐の花ならむ、木々の梢は春なほ遠く、ひとり落葉松のみ目さむるとき縁の色に染まれり。

輕井澤に霜の白きを見、淺間に雪の残れるを見る。田中あたりは桃の花や、遅れたれど、八重の櫻はいま盛りなり、畑には麥二三寸伸びて、菜の花とところ／＼に咲けり。

長野の驛に賣る蜜柑一個五錢、こゝの辨當の味あしきこと全國一にもやと思はる。

豊野あたりより東窓左に雪の山見ゆ、飯綱にや黒姫にや、あまりに多ければ残雪の趣きなし。

朝の八時半柏原に着く、車を下りて野尻さしてゆく、雪に包まれたる妙高山は吾がゆく手に聳えたり、芝ところ／＼生へたる廣きみち中にて山を寫す、細き白樺など松の間にまぢりて、深山に入りし心地のせられぬ。

ゆくこと一里あまり、野尻の湖見ゆ。日のかげ暖かき草原に三脚据へて、湖畔の杉をうつす。對岸の山には雪あり、麓はやゝ縁の色を帯びたり、水靜かにして舟一つだに浮ばず。すみれた

んぼゝみだれ咲く野を、黄なる蝶の高く低く飛ぶも清閑なり』野尻の町に入る、櫻は咲けど桃も李も蕾かたし、草も緑ならねば春らしからず、野尻館といふ名前のみいがめしき小さき宿屋に靴の紐ときぬ。

宿の椽より湖の方を見る、斑尾山は斑らに雪を戴きて高く湖面を壓せり。辨天島黒々と湖心にうかび、水は夕風に漣をたてたり、こなたの岸には鎮守の森にやあらん、形面白き杉の木立あり、梢のあたりを鳥群がり飛べり。

店の方には道ゆく旅人に、宿の人の泊りを勧むる聲すなり、古き道中記に見し街道の旅籠や、そのおもげの俵ばれて、何とはなしに心淋し。

夕飯に何もあげるものがないに、名物の蕎麥でもと、汁旨からぬを進められぬ。黒く粘り氣なき飯、辛くして臭き味噌汁、それには勝らむと思ひて三椀を代へぬ。

主翁は語る、このあたりは雪が深く、平地でも四尺はありますオゴイス(鶯)はやつとこの頃啼き初めましたと。

八日 晴

辨天島へゆき見むとて舟を求む、岸邊に繋がれたる一艘は、水や洩るらむ半ば沈みたり、舟夫は桶もて酌み出し、いざ召せといふ、漕きゆくうちに沈みやせむ、といと危ふげなり。

嶋はうち見たるより廣く、幾かへかある杉の老木數あまたあり。水に臨めるあたりは、槻の巨木生ひ茂りて、枝に葉なきこの頃も、下草くらく物凄かり。辨天の社は朽ちて傾きたれど、

猶幾とせかの風雨には耐ふべし。人住まず獸居らねど、夏は蛇を見ること多しといふ。

嶋を放れて南の岸に舟を捨て、春かすみ、臙ろに姿あらはず飯網の山をうつす。空の色曇れる日に似て暗らく、山の雪はわづかにそれと見分得るのみ、湖の水靜かに辨天島の影長く泛べり』町に近く、湖を前にして妙高の山を寫す。霞や、晴れたれど、遠樹の梢煙るがごとく、寫すに勞多かり。

街道を田口さしてゆく。家々の軒には李の花白うさきて美はし、菜の花も今さかりなり、斑尾の山を遠景に寫生二枚、汽車にて越後關山にゆき、岡本といへるに宿かる。

時早ければ近傍を見あるく。大なる社あり、裏の軒下には雪二三尺積れり。社の奥には杉林あり、折しも雪の妙高山は、沈まむとする日の光をうけつゝ、紅みに輝やき、黒き杉との對照極めて面白し、いそぎ一枚寫生す。春の日は永くはあれど、今日は朝より五枚のスケッチを得たり。

早くより臥床に入る、雨戸なき窓の月に明るく、蛙の聲きこゆ。

九日 晴

赤倉の温泉は、去年の出水に樋破れて、まだ湯は通はぬとなり妙高の麓には關の温泉あり、その奥には燕の温泉あり、四五里の程ときいて靴を草鞋に代へぬ。深林の間にある一筋の道を辿りつゝ、ゆくこと一里あまり、高原に出でたり、根曲竹多し、この笹の筍はこのあたりの名物なりといふ。

右にも左にも、また前にも、雪の山を見つゝゆく。小松生へた

る原の中にも、處々雪は残れり。關山を出でしより人に逢はず、淋しき道を、たゞあの黒きあたりが温泉にもやと歩みまいそぐ。

道のやうやく細うなりゆくころ、地に雪を見たり。初めの程は、しとくと上江りして水を含むこと多かりしも、いくばくもなく二寸三寸と量は増して、終には尺あまりもあらん、踏めば深く膝迄も隠れんとするなり、日の光りは鈍けれど、雪の白きは眼を射りて辛し。温泉に近く、松二三本たてるあたりに寫生す。

やがて關に着き富山屋といふに荷を預け、更に燕温泉の方へと山に分け入る。宿に飼へる猪犬の跡をつけ來りて、氣味あしくもありウルサクもあり、終に石を投げて遠く去らしむ。

山道の雪はいよ／＼深くして、所々崖の崩れしもあり危険甚だし、燕へは往けぬと人の言ふに、妙高の中腹にある大杉を寫す、日は照せども、霧たちて、近き山々すらいと朧るなり、暖かなれば雪の表は融けて、下なる笹の跳ね返る音ものすごかり。

宿に歸れば、よく喋べる小娘ありて、さきの犬よりも一層ウルさし、湯にゆかんとするに下駄を並べて、『東京のアンサンにこんな下駄で、これでも上等博覽會』など、『厄介な代物なるらし』湯槽は村の中程にありて、『インヂアンレット』を溶きしやうに赭く濁れり。夏ならでは微湯にして入りがたしといふ、今は風呂桶にくみ入れて、火もて湧すなり、病にはよきかしらねど、あたりのさまの清からぬに早々にして去りぬ。

夜に入つて宿の主人來り語る、あの小娘の父ほどありて辯舌爽やかなり、日毎山に入りて鑛脈をさぐりつゝありといふ。この家の枕、高さ一尺、長さ二尺を越えたり。

十日 晴

昨日の道を關山へ歸る。途中寫生二枚、雪の山の近きは寫すに難かり。關山のほとり木挽小屋を寫す、家の前には李の花さき、家の後ろには杉の森あり、苗場あたりと覺しき雪の山は、その背後に高く連れり。柚人は家よりいで來て、茶を召せと勧め、いと懇ろなり。

岡本に暫時休み、汽車にて柏原に歸り、ふじの屋といふに宿かゝる。客あまたあり。一酒客曰ふ、酒飲まぬ人間は袋が小さい、酒は大聲を出して飲むものだ、大聲を出さぬ奴は悪黨だ、酒は黙つて飲むではマツイ、食物は隠れて食つてはマツイと、勝手な議論に近處迷惑甚だし。

十一日 曇

柏原のほとりを寫生す。野にはキンポウゲあまた咲けり、腰すへて寫し居る時、郵便配達來りて、輪廓の初めより仕上に迄、二時間以上も去らず。暢氣なるかなと思ふ。

小流あり、堤にはアヅマ菊あまた咲けり。秋冬の花、タンホ、の類も咲けり。遠く雪の山を見、近く花の香をきく、信越界の春は極樂とやいはまし。午後の汽車にて東京へ歸る。